

寛平御時、歌奉りけるついでに奉りける

大江千里

葦田鶴あしたづの獨おくれて鳴く聲は雲の上まで聞えつがなむ

藤原勝臣

人知れず思ふ心は春霞立ち出で、君が目にも見えなむ

歌召しける時に奉るとて、詠みて奥に書き付けて

奉りける

伊勢

山川の音にのみ聞く百敷みを水廻を早ながら見るよしもがな

卷十八終

卷十九

雜體

長歌

題しらす

讀人しらす

逢ふことの 稀なる色に 思ひそめ 我身は常に

あま雲の 晴るゝ時なく 富士の嶺ねの 燃えつゝとはに

思へども 逢ふこと難し なにしかも 人を恨みむ

わたつみの 沖をふかめて 思ひてし 思は今は

いたづらに なりぬべらなり 行く水の 絶ゆる時なく

かくなわに 思ひみだれて 降る雪の 消けなば消けぬべく

思へども 闇淨えんじやうの身なれば なほやます 思は深し
足曳の 山した水の 木隠こかくくれて 沸たぎつ心を
誰にかも あひ語らばむ 色に出でば 人知りぬべみ
墨染の 夕べになれば 獨り居て あはれくさ
歎き餘り 爲すべむ術なみに 庭に出で、 立やすらへば
白妙の 衣の袖に おく露の 消けなば消ぬべく
思へども なほ歎かれぬ 春がすみ よそにも人に
哀あはれと思へば

古歌奉りし時の目錄の其の長歌

貫 之

千早振る 神の御代より 吳竹の 卅せち々にも絶えず
天彦あまひこの 音羽の山の 春がすみ 思ひ亂れて

五月雨さみだれの 空もとゝるに さ夜更けて 山ほとゝぎす
鳴くごとに 誰も寢覺めて 唐錦 立田の山の
もみぢ葉を 見てのみ忍ぶ 神無かみなづき月 しぐれく
冬の夜の 庭も斑はだれに 降る雪の 猶消えかへり
年ごとに 時につけつゝ あはれてふ とをいひつゝ
君をのみ 千代にと祝ふ 世の人の 思ひ駿河の
富士の根の 燃ゆる思も あかすして 別るゝ涙
藤ふじころも おれる心も 八千草やちくさの 言の葉ごとに
皇すめらみの 命おほせかしくみ 卷々の 中につくすと
伊勢の海の 浦の潮貝 拾ひあつめ 取れりとすれど
玉の緒の 短みき心 思ひあへず なほ新玉の
年を経て 大宮にのみ 久方の 晝夜わかず

仕ふとて かへり見もせぬ 我宿の 忍草生ふる
板間あらみ 降る春雨の 漏りやしぬらむ

古歌ふるに加へて奉れる長歌

壬生 忠岑

吳竹の 世々の古こと なかりせば 伊香保いかほの沼の
いかにして 思ふ心を 述のほへまし あはれ昔へ
ありきてふ 人塵こそは 嬉しけれ 身は下しもながら
言の葉を 天つ空まで 聞えあげ 末の世までの
あと、なし 今もおほせの 下れるは 塵に繼げとや
塵の身に 積れることを 問はるらむ これを思へば
古へに 薬けがせる けだもの、 雲に吠えけむ
心地して 千々の情なさけも 思ほえず 一つ心ぞ

誇らしき かくは誇れど 照る光 近き守まもりの
身なりしを 誰かは秋の 來る方に 欺たぶき出でて
御垣守みかきり をさくしくも 思ほえず 九この重かさねの
中にては 嵐の風も 聞かざりき 今は野山し
近ければ 春は霞に たなびかれ 夏は空うつ蟬せみ
鳴き暮し 秋は時雨しぐれに 袖を貸し 冬は霜にぞ
責めらるゝ かるゝ倍しき 身ながらに 積れる年を
記しるせれば 五いつの六むつに なりにけり これに添はれる
わたくしの 老の數さへ 彌多やよければ 身は賤しくて
年高き ことの苦しさ かくしつゝ 長柄の橋の
長らへて 難波の浦に 立つ波の 老の皺にや
瀬ほれむ さすがに命 惜しければ 越こしの國なる

白山しらやまの頭は白く なりぬとも 音羽の瀧の
音に聞く 老いず死なすの 薬もが 君が八千代を
わかえつゝ見む

君が世に逢坂山の石清水木隠れたりと思ひけるかな

冬の長歌

凡河内躬恒

千早振る 神無月かみなづきとや 今朝よりは 曇りもあへず
うち時雨しぐれ 紅葉とゝもに 古里の 吉野の山の
山おろしも 寒く日ごさに なり行けば 玉の緒解けて
扱こき散らし 霞亂れて 霜こほり 飄い固かたまれる
庭の面に むらく見ゆる 冬草の 上に降りしく
白雪の 積り積りて 新玉の 年をあまたも
過すしつるかな

七條の后うせ給ひにける後に詠みける

伊 勢

沖つ波 荒れのみまさる 宮のうちには 年経て住みし
伊勢の蟹も 船流したる 心地して 寄らむ方なく
悲しきに 涙の色の 紅くれなるは 我等なかが中の
時雨にて 秋の紅葉と 人々は 己おのがちりく
別れなば 頼む蔭なく なり果て、 とまる物とは
花すゝき 君なき庭に 群れたちて 空を招かば
初雁の 鳴き渡りつゝ よそにこそ見ゆ

旋頭歌せとうか

題しらす

讀人しらす

打ちわたす遠方人をちかたに物申すわれそのそこに白く咲けるは何の花なにぞも
かへし

春されば野邊にまづ咲く見れど飽かぬ花まひ賄なしにたゞ名なの告るべき花
の名なれや

題しらす

初瀬川ふる古川の邊に二本ある杉年を経てまたも逢ひ見む二本ある杉

貫 之

君がさす三笠の山の紅葉の色神無月時雨の雨の染むるなりけり

誹諧歌

題しらす

讀人しらす

梅の花見にこそ來つれ鶯の人來々々と厭ひしもなる

素性法師

山吹の花色衣主ぬしや誰問へど答へすくちなしにして

藤原敏行朝臣

いくばくの田を作ればか時鳥死出の田長ながを朝なく呼ぶ

藤原兼輔

七月六日七夕たなはたの心を詠みける

凡河内躬恒

いっしかと待またく心を脛はざにあけて天の河原を今日や渡らむ

僧正遍昭

睦言むつこともまだ盡つきなくに明けぬめりいづらは秋の長してふ夜は

讀人しらす

秋の野なまめきに婀娜かしがま立てる女郎花はなあな驚おどろし花はなも一時

秋來れば野たはべに戯たはるゝ女郎花はないづれの人かつまで見るべき

秋霧の暗れて曇れば女郎花の姿を見え隠れする
花を見て折らむとすれば女郎花うたゝあるさまの名にこそありけれ

寛平御時后の宮の歌合の歌 在原棟梁

秋風に結びぬらし藤袴つゝりさせてふきりくす鳴く

明日春立たむとしける日、隣の家の方より風の雪
を吹き来しけるを見て、其隣へ詠みて遣しける

清原深養父

冬ながら春の隣の近ければ中垣よりそ花は散りける

題しらす

讀人しらす

石の上古りにし戀の神さびて崇るにわれはいぞ寢かたつる
枕邊より脚邊より戀のせめ來ればせむかた無みぞ床中に居る
戀しきか形も形こそありと聞け立てれをれどもなき心地する

ありぬやと心見おてら逢ひ見れば戯れ憎きまでぞ戀しき

耳なしの山の口なし得てしがな思ひの色の下染めにせむ

足曳の山田の案山子おのれさへ我を欲しといふ愛はしきこと

紀のめのと

富士の根のならぬ思ひに燃えば燃え神だに消たぬ空し煙を

紀 有 友

逢ひ見まく欲しは數なくありながら人につきなみ惑ひこそすれ

小野 小町

人に逢はむ月のなきには思ひおきて胸走り火に心やけせり

寛平御時后宮の歌合の歌 藤原興風

春霞たふびく野べの若菜にもなり見てしがな人の摘むやと

題しらす

讀人しらす

思へどもなほ疎うとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらじと思へば

平 貞 文

春の野の茂き草葉の妻戀に飛立つ雉のほろゝとぞ鳴く

紀 淑 人

秋山に妻なき鹿の年を経てなぞや生きてのかひよとぞ鳴く

躬 恒

蟬の羽のひとへに薄き夏衣なればよりなむ物にやはあらぬ

忠 岑

隠沼かくれぬの下より生おふる蓴菜ねのなはの寐ぬ名は立たじ來るな厭いとひそ

讀人しらす

斯ことならば思はずとやはいひ果てぬ何ぞ世の中の玉響たまゆさなる

思ふてふ人の心の隈くまに立ち隠れつゝ見るよしもがな

思へども思はずとのみいふあれば否や思はじ思ふかひなし

我をのみ思ふといはれあるべきをいでや心は大幣おほぬさにして

我を思ふ人を思はぬ報むくいにや我が思ふ人の我を思はぬ

深 養 父

思ひけむ人をぞ共に思はまし正ただしや報なかりけりやは

讀人しらす

出で行かむ人を止めむよしなきに隣の方に鼻も嚏ひぬかな

紅に染めし心は頼まれず人をあくにはうつるてふなり

厭はるゝ我身は春の駒なれや野飼ひがてらに放ち捨てつる

驚さかに去年こぞの宿やどりの古巢ふるねとや我には人の強顔つれなかるらむ

賢さかしらに夏は人まれ笹ささの葉の騒さわぐ霜夜を我がひとり寝ねる

平 中 興

逢ふことの今は二十日に成りぬれば夜深からでは月なかりけり

左大臣

唐もろこしの吉野の山に籠るとも後れむと思ふ我ならなくに

なかき

雲暗れぬ淺間の山のあさましや人の心を見てこそ止まめ

伊勢

難波なる長柄の橋も造るなり今は我身を何に喩へむ

讀人しらす

誠實まめなれど何ぞは善よけく荊萱の亂れてあれど悪しけくもなし

興風

何かその名のたつ事の惜しからむ知りて惑ふは我一人かは

從弟いとこなりける男に寄よそへて人のいひければ

久曾

よそながら我身に絲のよるといへば唯偽うそに着すくばかりなり

讀岐

題しらす

願事ねごとをさのみ聞きけむ社やしろこそ果ては歎きの森となるらめ

大輔

歎き伐る山とし高くなりぬれば頼杖つらのみぞ先づ突かれける

讀人しらす

歎きをば伐りのみ積みて足引の山の峽かひなくなりぬべらなり

人戀おとこふることを重荷おもひと荷おひもて逢期あふこなきこそ侘わづしかりけれ

宵よの間に出でて入りぬる三日月のわれて物思ふ頃にもあるかな

其方そへにとと爲れば斯かり斯かく爲ればあな言ことひ知らず合あふさ離きさに

世の中の憂うれきたびごとごとに身を投げば深き谷やまこそ淺あくなりなめ

在原元方

世の中は如何に苦しき思ふらむ多の人に恨みらるれば

讀人しらす

何をして身の徒らに老いぬらむ年の思はむ事を優しき

興 風

身は捨てつ心をだにも投らさじ終にはいかなると知るべく

千 里

白雪のともに我が身はふりぬれど心は消えぬものにぞありける

題しらす

讀人しらす

梅の花咲きての後の實なればや酸きものとのみ人のいふらむ

法皇西川におはしましたりける日、猿山の峽に叫

ぶといふことを題にて詠ませ給ひける

卷十九終

躬 恒

侘しらに猿な啼きそ足引の山のかひある今日にやはあらぬ

題しらす

讀人しらす

世を厭ひ木の本ことに立ちよりて五倍子染の麻の衣なり

卷二十

大歌所御歌

おほなほひ
大直日の歌

新らしき年の始にかくしこそ千年なかれて樂しき終め

〔日本紀には仕へまつらめ萬代までに。〕

古き大和舞の歌

若木結ふ葛城山に降る雪の間なく時なく思ほゆるかな

近江振

近江より朝立ちくれば宇瀨の野に鶴ぞ鳴くなる明けぬこの夜は

みづぐさ
水莖振

水莖の岡の館に妹とあれと寝ての朝けの霜の降りばも

しほつ
四極山振

四極山うち出て見れば笠縫の島漕ぎ隠る柵無し小舟

あそび
神遊の歌

とりもの
採物の歌

神垣の御室の山の榊葉は神の御前に茂りあひにけり

霜八たび置けご枯れせぬ榊葉の立ち榮ゆべき神の木根かも

まきもくのあなしの山の山人さ人も見るがに山葛せよ

み山には霞降るらし外山なる正木の葛色づきにけり

陸奥の安達の眞弓我が引かば末さへより來忍びくくに

我が門の板井の清水里遠み人し汲まれば水草生ひにけり

ひろめのうた

さゝのくまひのくま檜隈川に駒とめて暫し水飼へよそにだに見む

かへしものゝ歌

青柳を片よ絲によ縫りて簾の縫ふてふ笠は梅の花笠

眞金まがねふく吉備きびの中山帯にせる細谷川の音のさやけさ

〔此歌は承和の大嘗會おほむねの吉備の國の歌。〕

美作や久米のさら山さら〜に我が名は立てじ萬代までに

〔これは水尾の大嘗會の、美作の國の歌。〕

美濃の國關の藤川絶えずして君に仕へむ萬代までに

〔これは元慶の大嘗會おほむねの美濃の歌。〕

君が代は限もあらじ長濱ながはまの眞砂まごころの敷はよみ盡すとも

〔これは仁和の大嘗會の伊勢の國の歌。〕

大伴 黒主

近江かみみののや鏡山かみみのを立てたればかれてぞ見ゆる君が千年ちとせは

〔これは今上の大嘗會の近江の歌。〕

東歌

陸奥むちのく歌

阿武隈に霧立渡り明けぬとも君なば遣らじ待てば術すべなし

陸奥はいづくはあれど鹽竈の浦漕ぐ舟の綱手つなで悲しも

我が夫せごを都に遣りて鹽竈の籬が島の待つぞ戀ひしき

小黑崎みつの小島の人ならば都の土産つとにいざといはましな

御侍 御笠と申せ宮城野の木の下露は雨に増されり

最上川上れば下る稻舟の否にはあらずこの月ばかり

君をおきて仇あだし心を我が持たば末の松山浪も越えなむ

相摸歌

こよろぎの磯立ちならし磯菜摘む童子濡らすな沖に居れ浪

常陸歌

筑波根の此面彼面に蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし
筑波根の嶺の紅葉落ち積り知るも知らずもなべて悲しも

甲斐歌

甲斐が根をさやにも見しが心なく横折りふせる佐夜の中山
甲斐が根を嶺越し山越し吹く風を人にもがもや言傳て遣らむ

伊勢歌

さふの浦に片枝差覆ひなる梨のなりもならずも寝て語らむ

冬の加茂の祭の歌

藤原敏行朝臣

千早ぶる加茂の社の姫小松萬代經とも色は變らじ

卷二十終

古今和歌集序

紀淑望

夫和歌者託其根於心地發其花於詞林者也。人之
 在世不能無為思慮易遷哀樂相變感生於志詠形
 於言是以逸者其聲樂怨者其吟悲可以述懷可以
 發憤動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於倭歌倭
 歌有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六
 曰頌若夫春鶯之嘯花中秋蟬之吟樹下雖無曲折
 各發歌謠物皆有之自然之理也然而神世七代時
 質人淳情欲無分倭歌未作逮于素盞鳴尊到出雲
 國始有三十一字之詠今反歌之作也其後雖天神

之孫海童之女莫不以倭歌通情者矣及人代此風
大起長歌短歌旋頭混本之類雜體非一源流漸繁
譬猶拂雲之樹生自寸苗之煙浮天之波起於一滴
之露至如難波津之什獻天皇富緒川之篇報太子
子或事關神異或興入幽玄但見上古歌多存古質
之語未為耳目之翫徒為教誡之端古之天子每
良辰美景詔侍臣預宴筵者獻倭歌君臣之情由斯
可見賢愚之性於是相分所以隨民之欲擇士之才
也自大津皇子之初作詩賦詞人才子慕風繼塵移
彼漢家之字化我日域之俗民業一改倭歌漸衰然

猶有先師梯本大夫者高振神妙之思獨步古今之
間有山邊赤人者並倭歌仙也其餘業倭歌者綿々
不絕及彼時變澆漓人貴奢淫浮詞雲興艷流泉涌
其實皆落其花獨榮至有好色之家以此為花鳥之
使乞食之客以此為活計之媒故半出婦人之右難
進大夫之前近代存古風者纔二三人而已然長短
不同論以可辨花山僧正尤得歌體然其詞花而少
實如圖畫好女徒動人情在原中將之歌其情有餘
其詞不足如萎花雖少彩色而有薰香文琳巧詠物
然其體近俗如賈人之著鮮衣宇治山僧喜撰其詞

華麗而首尾淳滯。如望秋月遇曉雲。小野小町之歌。古衣通姬之流也。然艷而無氣力。如病婦之著花粉。大友黑主之歌。古猿丸大夫之姿也。頗有逸興。而體甚鄙。如田夫之息花前也。此外氏姓流聞者。不可勝數。其大底皆以艷為基。不知歌之趣者也。俗人爭事榮利。不用詠倭歌。悲哉。悲哉。雖貴兼相將。富餘金銀。而骨未腐於土中。名先滅於世上。適為後世。被知者。唯倭歌之人而已。何者。語近人耳。義慣神明也。昔平城。天子詔侍臣。令撰萬葉集。自爾以來。時歷十代。數過百年。其後倭歌棄不被採。雖風流如野宰相。

輕情如在納言。而皆以他才聞。不以斯道顯。陛下御宇。于今九載。仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。淵變為瀨之聲。寂々閉口。砂長為巖之頌。洋洋滿耳。思繼既絕之風。欲興久廢之道。爰詔大內記紀友則。御書所預紀貫之前。甲斐少目凡河內躬恒。右衛門府生壬生忠岑等。各獻家集。並古來舊歌。曰續萬葉集。於是重有詔部類所奉之歌。勒為二十卷。名曰古今和歌集。臣等詞少春花之艷。名竊秋夜之長。況乎進恐時俗之嘲。退慙才藝之拙。適遇倭歌之中興。以樂吾道之再昌。嗟乎人塵既沒。倭歌不在斯哉。于時

延喜五年歲次乙丑四月十八日。臣貫之等謹序。

古今和歌集終

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
平家物語 下編	いろは文庫 下編	修紫田舎源氏 一編	平家物語 中編	俳諧七部集 全	平家物語 上編	文章軌範 全	武將感狀記 全	いろは文庫 中編	いろは文庫 上編
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
修紫田舎源氏 四編	東海道膝栗毛 下編	枕草紙 全	修紫田舎源氏 三編	古今集 全	やなぎ櫛 一編	東海道膝栗毛 上編	萬葉集 上卷	修紫田舎源氏 二編	墨田川梅柳新書 合卷 昔語質屋庫

袖珍文庫 16 古今集 正金 二十二錢

編輯者 鈴木種次郎
 發行者 山本銀次郎
 印刷者 石川金太郎
 印刷所 株式會社 秀英會

東京市神田區 三教書院
 電話本局 三三六一番
 振替東京 四四八〇番

明治四十三年十月廿六日印
 明治四十三年十月廿九日

袖珍文庫發賣所

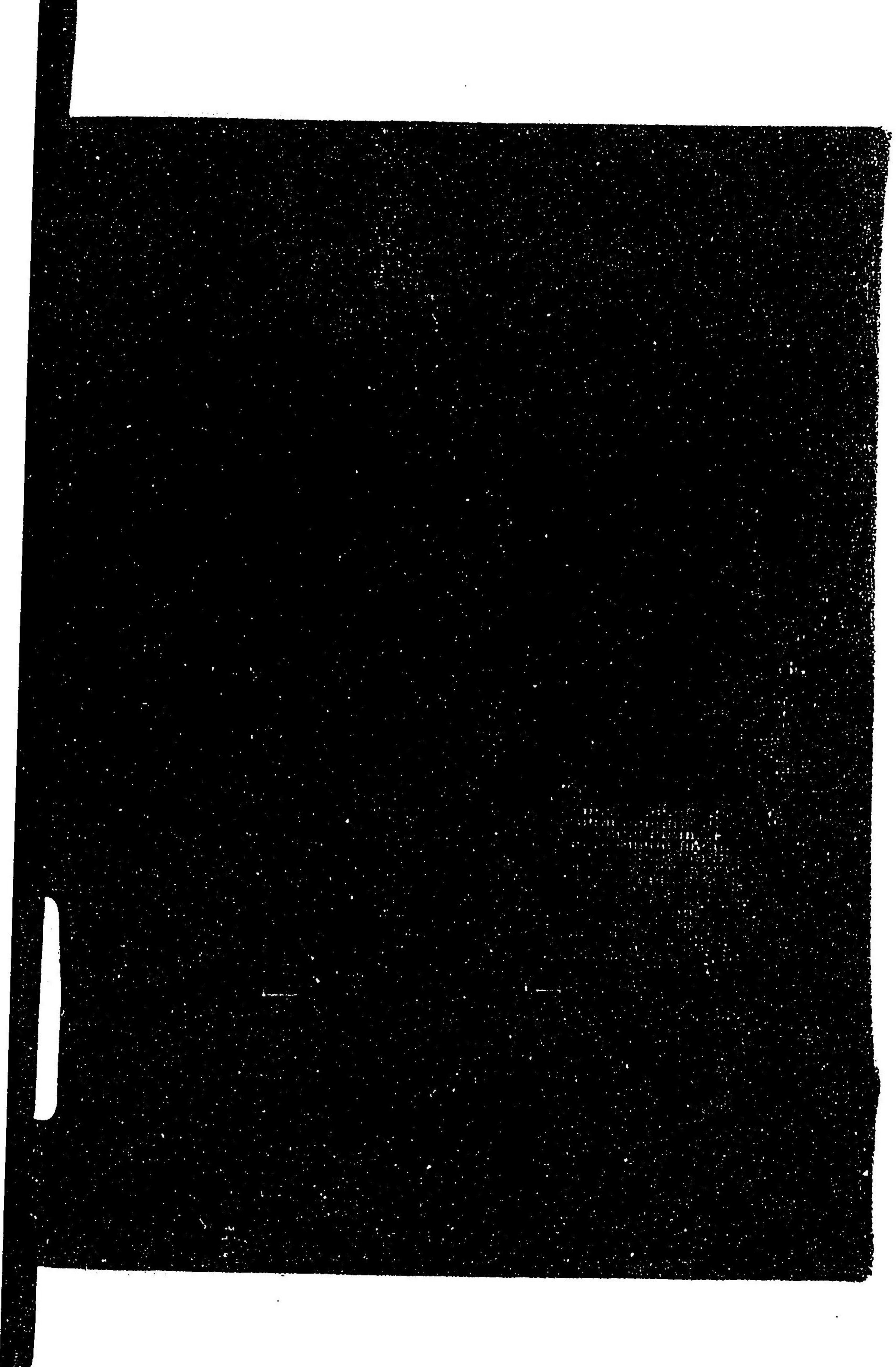
關東發賣元	東京市神田表神保町	東京堂
關西發賣元	大阪市東區北波邊町	杉本書店
東京日本橋	林平書店	
同	太洋堂	
同	至誠堂	
同	文林堂	
同	京橋前川書店	
同	東海堂	
同	北隆館	
同	神田上山屋	

同	同	新	名	京	同	岡	廣	久	博	京	大
同	同	古	屋	都	同	山	島	留	多	城	連
勉	萬	星	寶	東	山	積	積	菊	積	日	大
強	松	野	文	枝	陽	善	善	竹	善	韓	阪
堂	堂	書	館	書	書	館	館	書	館	書	屋
堂	堂	店	房	房	社	支	支	店	支	房	號

◎其他全國各書肆

261

591



085931-000-5

特63-894

古今集

三教書院

M43

DBD-0528

